農夫暮らしのススメ

上越市名立区　三浦元二

市役所を辞めて早いもので一年三ヶ月が過ぎようとしています。

昨年九月のJネットだよりでも「山ノ畑二居リマス」と題して、その頃はちょうど岩の原葡萄園でのアルバイトしながらの農夫暮らしをご紹介させていただきましたが、今年も春から（雨が降らないかぎり）毎日「灘立農園」で汗を流しています。

そして、奇遇にも今日からまた岩の原葡萄園のアルバイトが始まりました。

今、農園ではタマネギやジャガイモの収穫や大豆の苗の定植、そして雨の後に一気に伸びる草の刈り取りなど、毎日がんばっても追いつかないほどの仕事があります。

そうした時期であることに加え、灘立農園は無農薬有機肥料栽培を基本としていますので本当は毎日農園を見回り、作物の生長具合を確認したり、病気にかかっている作物を抜き取ったり、虫を捕殺したりしなければならないので、週三日とはいえ農園から遠ざかることについてはかなり悩んだ末でした。

灘立農園は生薬ではありませんので、いいえ、生薬でないからこそ有機栽培といったリスクの高いことができるのですが、嬉しいことにこうした灘立農園の野菜作りにご理解をいただいた妻の高校時代の友人へ昨年からほぼ毎月農園産野菜を宅配させていただいています。

こうして農園仕事をメインに、朝夕や休日には自転車やランで体を動かし、夜には二年前から始めたサックスを吹いたり、「灘立農園だより」というブログを書いたり…。

そして、これまであまりしてこなかった地域との関わりとして毎金曜日には社会福祉協議会が実施している一人暮し等高齢者宅へランチの配達ボランティアを行い、また、十三区に設置されている地域協議会にも参加しています。

これが私の誰からも（って少し大袈裟ですが）「羨ましがられている」農夫暮らしです。

この暮らしのどこが羨ましいのか…確かに私はこの気ままな暮らしには満足していますが、さりとて私にしかできない暮しではないし、こんな暮らしでよければみなさんもどうぞ！ということで今回の表題「農夫暮らしのススメ」にあいなったというわけです。

とはいえ、これは私ひとりでできることではなく、早期辞職を認めてくれ、昨年からは私の「扶養者」である妻と、こうして健康な体とほどよい広さの農園を残してくれた両親にも深い感謝をしています。

数年前から灘立農園の周りでは高齢化による耕作放棄地が広がっています。

畑仕事は予想以上に大変かもしれませんが、意欲さえあれば畑はいくらでもありますし、畑によって土も水も光も違っていますので、当然といえばそれまでですが、その畑にあった個性ある野菜作りができます。

そして、私はこの一年三ヶ月で約十キロ減量しました。

むきになって減量しようと思わなかったのですが、日々の暮らしの中で自ずと農夫的体躯になっていたようで、体重はいくらでも減らすことができます。

これが「自由な生き方が可能になり、健康によく、安全な自家製野菜が食べられる」農夫暮らしのススメです。

最後に画家で随筆家、そしてヴィラデストという農園を長野県東御市でやっている玉村豊男さんの著書「種をまく」の

左：三浦元二さん　「第13回センチュリーライド上信越」にて

中に、今の私の思いを表した一文を紹介して、私はまた農夫に戻ることにします。

（＊私の農夫暮らしを綴ったブログのアドレスはhttp://nadachi.exblog.jp/です。お時間と興味のある方はどうぞ覗いてやってください）

「きょうも、一日が終わろうとしている。暗くなって、足もとが覚束なくなる頃、農具を抱えて、重い足取りでようやく畑から帰ってくる。からだは泥のように疲れているが、満ち足りた心をもって。

どんな疲労にも、徒労というものはない。なにかを犠牲にしてまでやり遂げる価値のあることなどなにもあるまいが、かといって、どんなささいなことにも、それなりのやるべき価値はあるものだ。

日がな一日雑草取りに時間を費やしたとしても、損もしないし、得もしない。

雑草は生え、抜かれ、また生える。（略）ただ、そうして、一日を過ごす（やるべきことがあってそれをやる、終わらなくてもよいができるところまでやる）ことじたいが重要であり、人生とはそうして与えられた時間を死ぬまで過ごすことなのかもしれないと、漠然とだが、しだいに私は考えるようになってきている。これも、農という営みの功徳だろうか。」

フルートとのアンサンブルで演奏ボランティア

とある一日の灘立農園の日暮れ風景